

# へちまクサ

「おばあちゃんから幸せのおすそ分け」

vol. 64

上石津町一之瀬

「おばあちゃんが作った幸せのピエロ。あなたに幸せが届きますように」。そんなメッセージが付いた小さな人形が、たくさんの人手に届いている。日本国内のみならず、海も越えて、つくっているのは、上石津町の90歳になるおばあちゃんだ。

「い」らっしゃい」。やさしい笑顔が迎えてくれる。上石津町

一之瀬。山沿いの小さな集落に、90歳の小寺栄こでらさかえさんは一人で暮らしている。「体はどこも悪くない。足が痛いだけ。お掃除はヘルパーさんがしてくるけど、あとは自分で何でもできる」。台所で料理をしたり、洗濯をしたり。針の糸通しや読書も、眼鏡なんか使わない。テーブルの上には、たくさんのお小さな可愛い人形。栄さん手づくりのお人形を、人はこう呼ぶ。「幸せのピエロ」と。

「会」ったとたんには惹きつけられました。一目惚れというものでしょうね」。終戦から2年後の23

歳の時、上石津町の一之瀬に住んでいた小寺力男こでらりきおさんとの縁談話が持ち上がった。まだ返事もしないうちに、当の本人が突然名古屋にやってくる。そうせねばならない事情があった。1カ月前に奥さんを亡くし、1歳の敬子ちゃんけいこがいたからだ。栄さんはもちろん初婚。「駅前の喫茶店で、2人きりでじっくり話しました。事情を聞かされても、ためらいや迷いはなかったです。この人ならって、即座に決めたの」。

## 栄

さんが生まれたのは、大正14年の農家だ。5人兄弟姉妹の一番上だったので、尋常小学校を卒業すると、13歳で名古屋に働きに出た。勤め先は洋裁学校の寮。「寮生のお世話をしながら、先生や寮生にいろいろ教わって、洋裁を覚えたんですね」。この時の経験が、77年後の現在、生かされているのだから、人生とはわからない。



20代の頃の力男さん。



小学生の頃の敬子さん（左）、栄さん、2人の弟たちと一緒に。

3月に出会って、1カ月後に結婚。式もなければ、新婚旅行もなかった。「手拭一本買えなかったから、嫁入り道具もなし。親のお古の式服をもらっただけ」。

そうして、嫁いだ翌朝。妻と同時に母となった栄さんは、家の近くを流れる牧田川で、おむつを洗った。

慣れる間もなく、栄さんは翌年、翌々年に男の子を2人産む。1歳違いの3人の子どもを育てるのだから、もうてんやわんやの大騒ぎだ。しかも、「カラスの鳴かない日はあっても、敬子ちゃん泣き声が聞こえない日はない」。幼稚園の先生にそう言われるほど、離乳食が嫌いで、やんちゃな子だった。だが、栄さんには強い信念があった。「この人の子じもだから、きつとらしい子だ」といふことがあっても、辛せにする「よ」。

## 小

学生になった敬子さんはあることを知った。皆が留守をしていた時、近所の人がつい口をすべらせたのだ。娘に聞かれた栄さんは悩んだ。「まだ小さな子どもだったから、学校の先生に頼んで、上手に話してもらったんです。私は敬子に、本当のお母ちゃんやでな、とだけ言いました」。

実子との分け隔ては一切、しなかった。どの子も元気で、思い通りにのびのび育てばいい、そう思って育て上げた。

敬子さんが家から嫁ぐ日のこと。近所の人何気なく「本当のお母さんが喜んでいるだろう」と言った。それを聞いた敬子さんはひどく怒って、化粧が落ちるくらい、わんわん泣いたという。「この人が、私の本

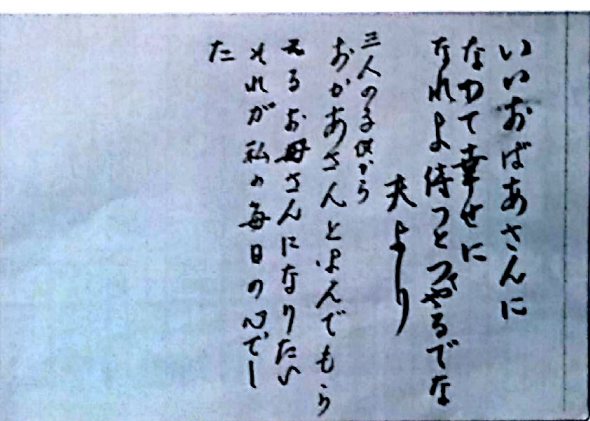


結婚式当日の栄さんと敬子さん。自宅の庭で。

当のお母さんだ！」と。栄さんは胸を張る。「私、あの世にいったら、前の奥さんに言うつもり。いい子に育てましたよ、って」。

## 夫

の力男さんは、83歳で亡くなった。57年の結婚生活で、ケンカをしたことは1度もない。「もう、本当に大好きだったの」。栄さんの想いに、力男さんも毎日「愛してるよ」と応えてくれた。予感があったのか、病気で倒れる前には、「一代、お前を愛し通したぞ。おおきに」と言ったそう。だ。「大好きな人にそこまで思われて、本当に幸せだった」。亡くなる前には、「いいおばあさんになって、幸せになれよ。待つとつてやるでな」と言い残した。栄さんはその言葉をノートに書きつけ、今も毎日読み返している。



力男さんの最期の言葉を記したノート

いいおばあさんに  
なつて幸せに  
なれよ待つとつてやるでな  
夫より  
三人の子供は  
あかあさんとよんでもう  
えろお母さんになりたい  
メレが私か毎日の心でー  
た

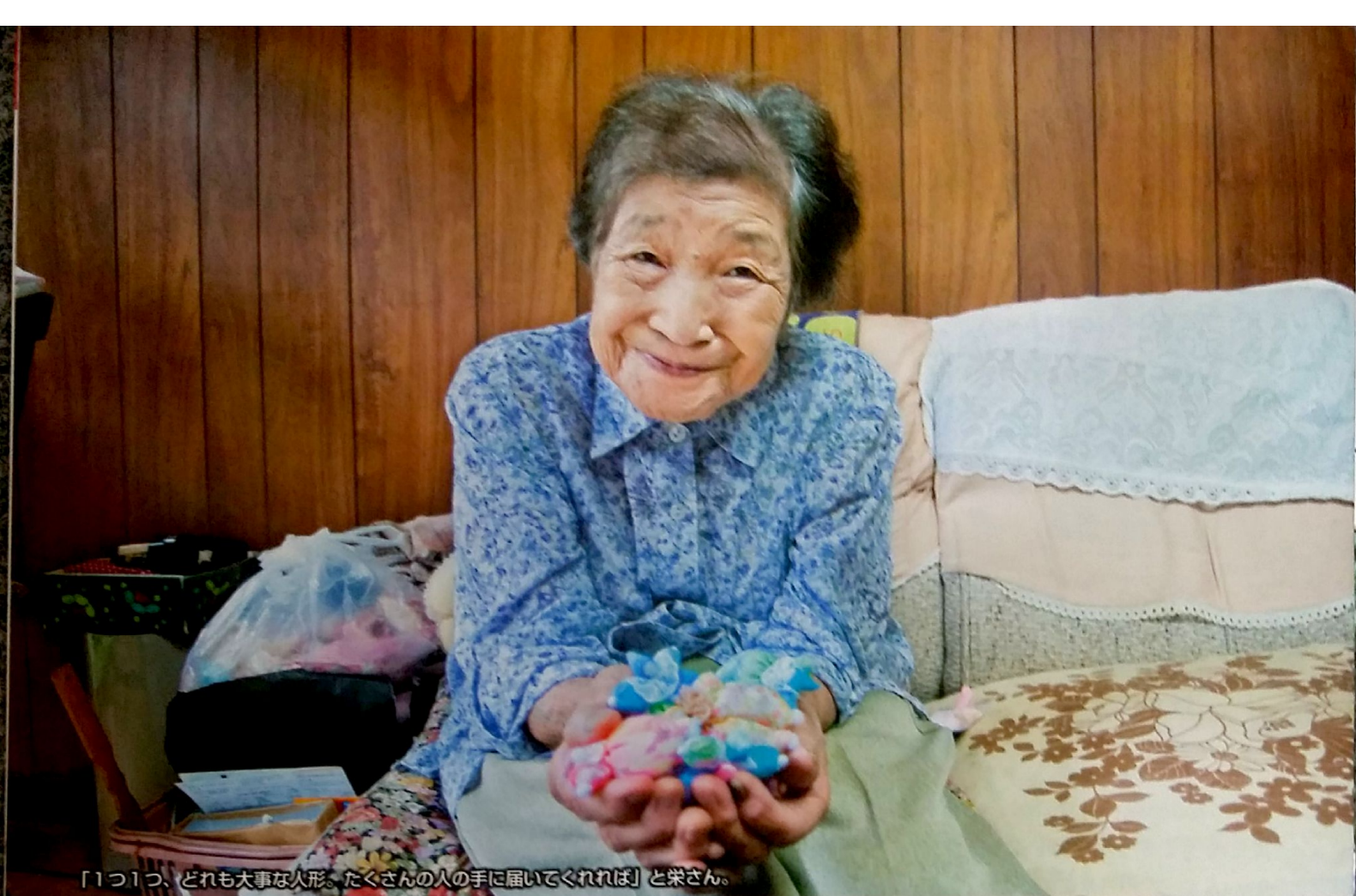
人になった栄さんは、昔から得意だった裁縫で、人形をつくり始めた。「娘にあげようと思ったんだけど、大きなものは邪魔になるでしょ。小さいものなら、いいかなって」。顔や手足は綿、服は端切れとレース。掌の半分くらい、小さな可愛い人形ができた。

一宮に住んでいる敬子さんは、栄さんからもらったたくさんの人形を、知り合いの喫茶店の人に分けた。「ピエロみたい」と言い始めたのはその人だ。店に置いてみたところ、お客が欲しがるので、「おばあちゃんが作った幸せのピエロ」という立て札を付けてみた。するとそれがまた評判になった。自分の知らない所で、自分のつくった人形が、人から人の手へとわたっていく。これまで家族へ向けられていた栄さんの愛情が外へとあふれ、やがて大きな広がり喜びをもたらすことになる。

## 老

人福祉施設、病院、保育園：様々な場所で、幸せのピエロは配られ、手にした人たちの新たな縁を結んでいる。保育園の園長からは「ぜひ、来て下さい」と、催しがあるたびに招待され、園児たちとも交流をもった。

お客さんに配るといふ会社の社長からは、毎月依頼が入る。昨年は東北



「1つ1つ、どれも大事な人形。たくさんの人の手に届いてくれれば」と栄さん。

の被災地にも送られた。チャリティーの記念品などに使われることもあれば、結婚式のプレゼントにもなる。「ピエロを身につけていたら、いい婿がきたと喜ばれて」。

愛知万博の時は、ある出店者が店頭飾っていたところ、外国人が喜んで持って行ったという。今は中国に送る人形を頼まれて、制作中だ。「どれだけ作っても、足りない」。栄さんは笑う。

これほどたくさんのお札が出るのに、経費は全て自費。お金は一切、とらない。「人形は私に幸せを持ってきてくれる。これほど高価なことはない。喜びの心は、一銭もいらぬのよ」。自宅には人形をもらった人たちから、お礼の手紙や色紙などがたくさん届く。

**足** が弱ったため、今は毎日を家の中で過ごす。だが、「それも幸せ。だからこそ、こうやって家で人形づくりができるでしょ。つくらせてもらえることが有難い」と笑う。孫たちが送ってくれる布地やレースを使って、栄さんは一針一針、心をこめてつくりあげていく。「この子は、誰のところに行くのかな」。そんなことを思いながら。



たくさんのお礼の手紙や色紙は、栄さんの宝物だ。

**ど** うせ生きていくなら、笑顔と幸せだけで生きよう。今日一日を最高に生きていけばいい。幸せな人には、幸せがついてくるから。そういう人がつくる人形だからこそ、皆がほしがるのではないか。

「幸せのピエロ」は、人を愛し、人に愛されている栄さんからの、幸せのおすそ分けだ。

\* 次回は池田町です。